新潟・下町（したまち）・坊城（ぼうじょう）遺跡C地点

1 所在地　新潟県北蒲原郡中条町本郷町・江上・館ノ越（たてのこし）

2 調査期間　一九九八年（平10）五月～一一月

3 発掘機関　中条町教育委員会

4 調査担当者　水澤幸一

5 遺跡の種類　荘園遺跡

6 遺跡の年代　八～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

中条町のある胎内川流域一帯は中世荘園として名高い摂関家領奥山荘の所在地であり、荘域は現在の中条町・黒川村を中心に、関川村・荒川町・加治川村の一部まで含む広大な地域を占めた。町内本郷町の微高地上には一五世紀の在地領主中条氏の居館である江上館跡（国史跡奥山荘城館遺跡）が立地するが、下町・坊城遺跡はその西～南隣に広がる遺跡であり、江上館との関連が注目される。

（中　条）

下町・坊城遺跡は、A～Cの三地点で調査を実施しており、一九九六年～九九年までの四ヵ年で調査面積は二五〇〇〇㎡を越える。これに北東に近接する一五世紀の領主居館である江上館跡の調査面積を合わせると、三〇〇〇〇㎡以上の中世遺跡を調査したことになる。

このうち、江上館の西南約四〇〇mのC地点では、長さ一六〇mにわたって検出したL字形に流れる幅五～二五mの川の両岸、及びその北方に立地した居住地が見つかっている。時期的には、一二世紀後半～一四世紀が主体であるが、一二世紀前半以前の遺物や、川の埋没後に営まれた一五世紀の遺構・遺物もかなりの量が出土しており、中世を通じて生活が維持されていたものと考えられる。

遺構は、掘立柱建物一〇七棟、井戸二二基などがあり、特に八角形の井戸枠を持つものは注目される。南西隅では、一五世紀に川を礫や木枝で埋め立てて造った道路敷もみつかっている。

本地点を特徴づける遺物は、大量の土器皿と漆器である。土器皿は、当該期の遺物の過半を占めており、越後では特異な組成である。これは、瀬戸・美濃巴紋瓶子・水注、青磁大型香炉・双魚紋皿、青白磁、緑釉盤などの高級陶磁器とともに遺跡の性格を物語っている。ただし北隅では、小鍛冶の炉もみつかっており、職人の存在も認められる。

遺構配置図（●木簡出土地点）

川跡からは、大量の焼物とともに曲物・下駄などの木製品が出土している。中でも注目されるのは、一五〇個体を越える漆器である。器種には、椀・皿・盆などがあり、白木の椀・皿も三〇個体を数えた。漆器のほとんどは総黒色の製品であるが、漆絵を有するものも二割程ある。これらにより、当時における漆器の重要性が明らかとなったと言えよう。

このようにC地点の性格としては、江上館築城以前の奥山荘の中心地と考えられ、居住者としては惣領地頭である三浦和田（中条）氏クラスの存在が想定される。

木簡は右に述べた川跡から、漆器などとともに出土している。層位的には、褐色砂質土からの出土で、ベタ高台の漆器皿や青磁鎬蓮弁紋椀と同一の層位であることから、一三世紀の所産と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈南無阿弥陀佛〔しちくわいきカ〕□□□□□□」
　　・「〈南无阿弥陀佛〔しちくわいきカ〕□□□□□□」　394×40×5　061

完形の木簡で、表裏同文である。全長四〇㎝近くの大形品で、比較的薄い。頭部はややえぐれる圭頭で、基部に二対の刻目が入れられている。また片面の頭部のみが黒く塗り潰されている。下部は、両側から斜めに切り込み尖らせているが、左右非対称である。文字は、名号及び「しちくわいき□□」と記され、七回忌の供養に関わ

るものであることがわかる。このような形状と文字から、本木簡の用途は供養塔婆であることが想定される。

なお、釈読については、青山学院大学藤原良章氏のご教示による。

9 関係文献

水澤幸一「越後国奥山荘政所条の都市形成」『都市の求心力―城・館・寺』（中世都市研究会第七回研究集会〈山形大会〉資料集）（一九九九年）

（水澤幸一）

新潟・船戸川崎遺跡

1 所在地　新潟県北蒲原郡中条町城塚

2 調査期間　第四次調査　一九九八年（平10）八月～一二月

3 発掘機関　中条町教育委員会

4 調査担当者　吉村光彦

5 遺跡の種類　集落跡・官衙関連遺跡

6 遺跡の年代　四世紀、八～九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

船戸川崎遺跡は、塩津潟に流れ込む舟戸川の河口に位置する集落跡である。遺構はほとんど検出していないが、第二次調査と第四次調査で律令制下の祭祀に関する遺物群が大量に出土した。すなわち一九九七年の第二次調査で検出された川跡からは、人形三点・封緘木簡状木製品二点・盤七点・曲物・付木などの木製品が出土しており、祓が行なわれていた可能性が考え

（中　条）